

第33回 大阪文学学校賞

「小説部門」受賞作品「鮮血」 田中美代子

「詩部門」受賞作品「シール」 堀内美希

「佳作」 「波の背の背にゆられて父還る」 宮地 浩子

「奨励賞」 「行き先」 畑 章夫

「エッセイ・評論・ノンフィクション部門」 受賞作品 「五体不満足は大満足」 渡利 真

選評

高畠 寛／奥野 忠昭／長谷川 龍生／中塚 鞠子／葉山 郁生／音谷 健郎

特別講座

どのように調べて小説を書くか——新島八重を中心に 福本武久

「秀作の樹・個性の花」

詩

鬼さんこちらあの子をあげる 早田 真由美
電子レンジ 大野 直子
陰暦のだいこん 花井 隆二

牙

いちのせまりえ

詩時評 1

エッセイ

春の夢

書き残すということ 苗村 吉昭

小説

夏の泡——未必の故意—— 森 かつら
お盆帰省 藤田 友房
たべつくされるまえに 大梅 健太郎

書評

近藤 圭一／岩津 航／西岡 重紀／山田 兼士 編

小説

こののはかのん

『福永武彦を語る 2009-2012』

小説

佐久間 慶子

小説

稲田 範久『お参り百景』

日野 範之

樹林

特集「短編小説・恋愛」

山ごもり 梶原 もえぎ

みれんの徒 中丸 惣太

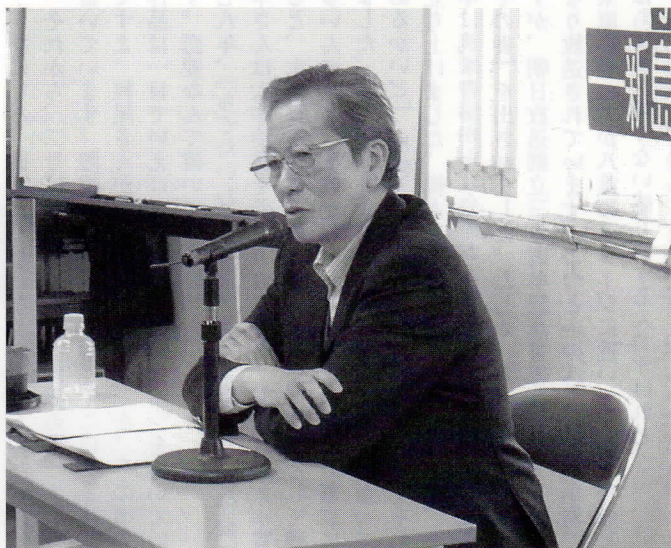
とりどりの響き 瀧野 千穂

2013.1.19(土)

どのように調べて小説を書くか

——新島八重を中心に

福本 武久 (作家)



文学学校教室で講演する福本武久さん

高島寛 文校の大先輩である福本さんの紹介をしたいと思います。一九六〇年代末に大阪文学学校に入られて、その後京都文学学校にも関わっておられたように記憶しています。我々は「らぐたいむ」という同人誌を一九七五年に立ち上げました。福本さんは発起メンバーの一人です。他のメンバーは、もう文校を離れて久しいですが、村田拓という名物チャーター……そして、その村田さんに連れてこられた奥野さん、飯塚さんと私、女性は一尾さん、森沢さんという人がおられました。岡さんも客員としてちょくちょく来ておられました。十人くらいで始めたんですけど、そのうち八人くらいになつてしまいました。

創刊号に、私と福本さんと奥野さんの作品が載っています。どういう作品か、簡単に紹介しますと、私の作品は「コンドルは飛んで行く」という、嫁さんも子どもも捨てて家を出る話です。いまだにそうですが(笑)。福本さんのは「夕やみの迷路」といって、たしか会社から帰る途中、自分の家がわからなくなつて迷子になる話だったと思います。奥野さんの

作品は「家具」という、家具が一人でしゃべったり踊ったりする話……なにしろ、彼はけつたいな小説を書くのが好きですから。それから、二号には飯塚さんが「陸橋の南」という作品を書いています。陸橋というのは、すぐそこにある陸橋のことですよ。軽尾さんが「湾の外へ」でしたか。その頃の我々の作品は一言でいえば「日常の中の非日常」を書いているんです。恋愛なんて書いていない。

一九七八年、「らくたいむ」に発表した「電車ごっこ停戦」で、福本さんは太宰治賞を受賞されました。芥川賞と太宰賞を比べると、太宰賞の受賞者の方が、後々まで作家として残る人が多いんですよ。それから、一九七九年に転勤で東京に行かれました。その頃、「らくたいむ」が五年目で廃刊になって、私が「あるかいど」、奥野さんが「せる」という同人誌をそれぞれに立ち上げました。福本さんは太宰賞を受賞した後、一九八三年に筑摩書房から『会津おんな戦記』、新潮社から『新島襄とその妻』を出されました。たしか一九八五年だったと思いますが、朝日放送創立三五周年記念番組としてテレビドラマになり放送されています。このときの八重は栗原小巻でした。栗原小巻の方が八重のイメージに近いですね。今のヒロインはちょっと頼りない感じがするんですけれど。

それから三〇年近く経ち、東北震災があつて福島がクロイズアップされ、彼の作品が日の目を見ることになりました。私が電話で「自分の作品を勝手に放送されていいのか」と聞いたら、ものすごく喜んでいうんです。びっくりしてね。自分がコッソコ書いた小説をNHKに横取りされたわけだからね。でも、後から、なんで喜んでいいのかわかり

ました。彼は八重に惚れているんですよ。八重が有名になるのが嬉しいんやなあ。これは司馬遼太郎の『竜馬が行く』と一緒にです。惚れまくって書いている。作中人物に惚れないといかんですね。惚れても、嫁はんは文句言わんからね。実にありがたい。

福本さんのこの小説は調べ書きです。いろんな資料を集めて人物を造形するわけです。誰か、今まで他に書いた人があつたら別だけれど、新島八重は福本さんが初めて書いているんです。それまでほとんど知られていなかった人物です。自分で造形して、その人物に惚れるということはあり得るんですよ。人間が生きてくる。調べ書きでなかったら、こうはならないわね。近くにモデルがいたり、家族のことを書いていたりしてもこうはならない。これは調べ書きの作者冥利に尽きる話だと思います。

司馬遼太郎の書いた坂本龍馬なんていうのは、歴史上の人物でおそらく一番人気がある人物でしょうね。今回大河ドラマになる八重さんもね、ひよっとしたら歴史上の女性で一番人気のある人になるんじゃないかと思う。NHKがしっかりとってくれたらね。事実、こないだ放送を見たら見応えがありましたね。福本さんは彼女を発掘したわけやからね。

そういうわけで、福本さん、よろしくお願いします。

*

高島さんからご紹介いただきましたが、私は文校の古い修了生です。いつのころだったのか、なかなか思い出せなくて、たまたま文校のホームページを見ていたら、沿革のところに「三一期」とあったので三一期なのでしょう。最初の一年は

通教で、その後の一年は研究科の夜間部に通っておりました。研究科の半ばぐらいから、文校周辺の人たちといろんな雑誌に関わるようになり、その最後は「らぐたいむ」でした。同人にはここにおられます高畠さん、飯塚さん、奥野さん、先ほどもお話に出てきました村田拓さん、松原真理子さん、森沢友日子さん、軽尾たか子さんなどがおられました。皆さん、それぞれチューターとか、いろんな形で文校に関わっておられる方ばかり。ですから、私にしてみれば「らぐたいむ」に属していれば、依然として文校に来ているような感じでした。事実、文校を取り巻くさまざまな創作集団もひつくるめて文校ではないか、と考えています。

このように長い間、文校との関わりで物を書き、同人誌に関わってきた、結局、この人たちが私の人生を変えたのではないかと……。それが幸であったのか不幸であったのかと問われれば、これは積極的に「幸であった」と思っています。今まで書いてきたものには、いくつかのジャンルがありまして、一つめは障害者とその家族の絆をとりあげた小説のグループです。『電車ごっこ停戦』とか、『家族トライアングル』、『疾走する家族』という作品があります。二つめは今日これからお話するテーマとも関わってきますが、調べて書く小説群、『会津おんな戦記』や『新島襄とその妻』、あるいは『舌剣奔る』であるとか『織匠』、『地の歌人三ヶ島霞子』などがあります。三つめはスポーツに素材を求めた小説群ですね。新聞連載した『湖の子たちの夏』、『ラストラン』など。四つめがビジネスエッセイに属するもの。あとは児童向けの読み物、人物ルポなどもあります。だいたいこのような幅の中で

仕事をしているというのが現状です。

その中でも小説にいちばんこだわってやってきました。なぜ小説なのかというと、一つは、人間に対して非常に興味があるからです。それから、もう一つは……。たとえば今日は「調べ書き」というテーマで八重についてお話するわけですが、この新島八重なる人物がどんな人だったのか、あるいはその時々どんなことを考えていたのかを追求めていくことになる、これは小説しか手だてがない。論文でもない、学術研究でもない、これは小説だろうと……。

たとえば先ほどの高畠さんのお話にもありましたが、坂本龍馬、あれほど生き生きとした魅力的な人物として現代の世によみがえったのは、司馬遼太郎が『竜馬が行く』を書いたからだろうと思うんですね。これが小説の力である。そのように信じて疑いません。だから小説にこだわってやってきましたし、これからも変わることはないでしょう。

それでは、ごく普通の一般的な小説と、調べ書きと言われる小説とではどこがどのようにちがうのか。端的にいえば、プロセスが少しちがうのではなからうか。成立の回路がちよっとちがうのかな……。ごく普通の小説の場合、たとえば私たちが見たり、聞いたたり、考えたりしたことが、ある種の刺激になって、心の中に何か引つ掻き傷みたものができる。それがだんだん膨れあがってきて醗酵してくる。そして、「どうしても書きたい」という思いに突き動かされるようになる。そういうところから始まります。自分の内部から溢れ出るといえるか、そういうものが大きなエンジンになってゆきます。

ところが、調べ書きの小説になると、最初に「これは面白いな」と思うものの……、それは事件であったり、人物であったりするわけですが、いずれも外からやって来ます。何か、外からやって来た面白いもの、それに興味を覚えるところからスタートするのではないか。けれども、そういう知的好奇心だけでは、すぐに書くとういう内的衝動には結びつかない。大変興味深い、面白い。けれども「書く、書きたい」というところに一発点火していきかないのです。

実際に歴史小説、あるいは評伝小説を書くとしたら、かなりの作業とエネルギーが必要になってくる。最近ではテレビドラマは歴史的なもの、あるいは時代物、これらは金食い虫だと言われるのですが、小説も似たようなところがあります。たとえば人物についての資料、時代背景、事件についての記録、さらに生活の細部までの史料が必要になってきますから、かなりの手が掛かる。そして、それは多ければ多いほどいい。あとで気がついたら、途方もない作業を重ねているのです。そういう気が遠くなるようなプロセスがある。だからそれらを一気にふつとばすような強力なエンジンが必要になってきます。

それは何なのか。ありきたりですけれども、「書きたい」という思いではない。しかも、ただ書きたいという漠然としたものではなくて、この人の、この事件の、こういうところをこんなふうに書きたいという、かなり具体的なものになってくる。それは人物に対する思い入れであったり、ある衝撃的なシーンであったり、あるいはその人の言葉であるかもしれない。そういったものに誘発されてくる。

私の例でお話しますと、最初に調べ書きの小説として書いたのが『織匠』という作品でした。これは太宰賞をもらって小説を書き始めて、二つめの作品で、舞台は明治維新の京都です。

明治の世になって京都は、東京遷都で一時的にたいへん寂れました。とくに織物の町西陣は、その一番の得意先が皇室であり公卿だったので、得意先を失って大打撃でした。そこで当時の京都府はヨーロッパの先進技術を導入して、西陣の産業革命をめざします。まず三人の名もない職人をフランスのリヨンに派遣しました。かれらはまる一年、リヨンで織物修業し、機械とともに新しい技術を持って帰ってきました。そして西陣はよみがえったのです。これは上下二巻、一千枚の小説になりました。版元の筑摩書房が倒産し、会社更生法で再生して一年ぐらい先に出版本ですが、新人の上下二巻の小説本をよくぞ出してくれたなと思います。おそらく今だったら出ないでしょう。当時は出版社も懐がひろかった。

実はこれ、私の曾祖父の話なのです。こどものころから祖母から「おまえたちの曾祖父はフランスから新しい技術を持って帰ってきて伝えたんだ」と、よく聞かされていました。事実、西陣織会館に行ったら記念碑があります。自家にも、屋根裏に遺品がたくさんありました。しかしながら、こどものころは何の興味もなかった。祖母が死んでしまったら、そんなものはすっかり忘れてしまいました。ものを書くようになってからも、まったく眼中になかった。

ところが、あるとき物置を整理しなければならなくなり、その作業中に、曾祖父が残したと思われるある文書を見つけ

たのです。それは彼が西陣の織物組合に宛てた伺書の下書きみたいなものでした。「誰が西陣に新しい機械を持ってきたか、よく調べてくれ」と繰り返している。「何とてや組合役員様には小便を仕かけられ候」などと書いてある。「用向きがあれば、そちらから来い」と言われたが、そんな言い方はないだろうというようなことが綿々と書いてありました。フランスから帰ってきて二五年が経って、主人公佐倉常七は六三歳になっていました。新しい技術を伝えるために懸命に働いてきたのですが、そのころ人生の最終局面を迎えていたのです。当時その技術を商売に活かし、織屋として成功した人たちは世間で持ち上げられているけれども、常七たち技術者は忘れられた存在になりつつあったということが、その伺書の文面からうかがえました。

そのとき、この人の孤独感というものはいったいどのようなものだったのだろう、いったいどういう人生を送ってきたのだろうかと、話としてではなく、人間の姿としてそれを受け入れてみると、自分がその人へ乗りうつたような感覚になって、何か見えてくるものがあった。その常七という人物がにわかに膨らみ始めて、書いてみようという気になったのです。

いわば、古い文書からひるがえってきたその人の肉声みたいなものです。これが大きなエンジンになっていきました。そうなると、現金なもので、物置で埃をかぶっていたがらくたの山がにわかに宝の山になるわけです。フランスで買ってきた織物の世界地図、街で画家に描かせた肖像画、食事に使っていたナイフとフォーク……、今のものとちがってものす

ごく馬鹿でかいナイフとフォークなのです。さらに当時のパスポートとか、織物の紋紙、旅行記のメモ書きみたいなもの、そういうものが次々と出てきて、なにやら語り始めるのです。しかし、そうはいっても最初は小説に書くなんてことは、おおよびもつかない話でした。まるで雲をつかむような感じだったのですが、最終的にはなんとそこから一枚の小説が生まれました。売れ行きはたいしたことがなかったのですが、雑誌や新聞にはかなり取り上げられて、NHKからはドラマ化の話も来しました。ドラマになるのかと期待していましたが、それっきりでした。そんなものは十（とお）話があったら一つ物になればいいほうだと後で聞かされ、そんなものかと初めて思い知りました。

執筆にあたっては明治維新の京都の状況、西陣の状況、フランスのリヨンは当時どのような街だったのか、文献資料は集められるだけ集めました。けれども、常七について書かれたものがほとんどなかった。本人の書いたかんたんな報告書ぐらいのものでした。そうなると、周辺の材料を集めてくるしかない。同時代にフランスに渡航した人の旅行記、あるいは当時フランスにいた人たちの記録、そういうものから推測していく……。それしか道がなかったのです。

すぎる思いで、主人公の孫たちも追いかけまわしました。私にとつては伯母たちですが、母も含めると主人公の孫は四人いて、幸いなことにみんな存命でした。生前の祖母が話していたこと、常七について語り伝えられていること、何でもいいから聞かせてくれ……と迫ったのですが、「そう言われても、すぐには思い出せない」と言われてしまい、それでも

取材を繰り返すうちに「そういえば、こんなことを言っていた」と電話をくれたり……で、少しずつ途がひらけてきました。そういうものをこまめに集めて、そこからまた文献資料を漁っていきました。最後には、機会があり、リヨンまで行ってまいりました。

結果的に、よくあそこまで克明に調べたといわれるのですが、本人はそれほど思っていない。ひとえに書きたいという思いが強かった、そのエンジンが強力であったということにつきます。

その他の作品も、資料らしい資料はほとんどなかった。今日テーマに取り上げた新島八重についても、ほとんど無名の人でした。会津へ行っても、名前は知っているけれども詳しいことは知らないといわれ、同志社の社史編纂室をたずねても、あったのは二ページほどの雑誌の記事だけというありさまでした。ほとんど世に知られていない人物……。当然のごとく文献資料はないわけです。

この『会津おんな戦記』『新島襄とその妻』が新潮文庫になったときに、新潮社のPR誌「波」に東えりかさんに書評を書いていただきましたが、そのことについて次のように触れています。

「会津にも同志社周辺にも資料は少なく、調査は困難を極めたようだ。しかし資料が少ないことが、小説家にとっては味方になるときがある。明治維新後の歴史は詳しく残っている。八重はそのとき、何をやっていたのか。資料がないなら想像で埋めていけばいい。この二作は作家の想像力がフルに発揮され、物語の中に生き生きとした八重の姿が浮かび上がって

きたのだ」

想像力で埋めていけばいい……と、おっしゃるのは、まさにその通りですが、これがどうしようもない茨の道なのです。たいへん苦しいものがあります。苦しい中に楽しい一面もあるのですが、書く身としてはかなりしんどい（笑）。

ところで、この新島八重のシリーズですが、実は先にお話ししました『織匠』から出てきたといってもいいでしょう。『織匠』を書くときに、京都の明治史、なかでも産業史をたねんに調べましたが、そのときに、維新の京都のブレインをつとめていた元会津藩士の山本覚馬という人物が浮上してきました。八重の兄ですね。維新のころには、ほとんど目が見えなくなっていました。明治京都の設計図を書いたのは、この覚馬にはかならないということわかってきた。

この覚馬の妹に八重という女性がいて、彼女は戊辰戦争で鶴ヶ城に男装で籠もり、小銃をとって戦った。そして維新後は京都にやってきて、洋装・洋髪のマダンレディーとなり、新島襄と結婚したと記録にあったんですね。それで興味を持ち、八重についていろいろ調べてみました。

ところが八重は非常に評判が悪い。悪妻伝説にまみれていたのです。しかし悪女とか悪妻とかいうことになると、物書きとしては非常に興味をそえられる。そこで、さらに、突っ込んで調べていくと、逆になぜ悪妻と言われるのがよくわからない。むしろ、近代女性の先駆けとして、もつと知られてもよい存在ではないか。そんなところから、八重を近代女性の先駆者として甦らせてみたいと思いこがれるようになりました。

高島さんがいみじくも「八重に惚れた」と言われましたが、まさにそういう側面から接近していった。『織匠』を書き終えたら、次は八重の話かなとひそかに思うところがありました。結果的にその後、三〇年かかって、八重についての小説を三作と、関連する本を三冊書いてしまったことになりました。今年の大河ドラマを楽しんでいただきたいという思いもありますから、その八重について概略をお話しておきましょう。八重は幕末から、明治、大正、昭和……と、八八歳まで生きました。当時としてはかなりの長命です。

彼女の人生はおよそ四つに区分されます。一つは生まれ育った会津若松時代ですね。鶴ヶ城にこもって籠城戦を戦った時代で、二七歳ぐらいまで。それから、京都へやって来て新島襄と共に過ごした時代。これが二〇年足らずですね。三つめは襄の死後、社会活動につくした時代で、これも二〇年足らず。それから晩年、六〇歳以降ですね。女流茶道家として過ごした時代です。いつの時代も常に過去に囚われることなく、前を向いて自分の人生を切り開いていった。つねに女性として時代の先端を歩んだ人だったのです。

最初の会津若松時代ですが、いわばサムライレディーとも言うべき、たいへん勇ましい時代です。もうすでにドラマは始まっており、ご覧になった方もおられると思いますが、あんなふうには、いくぶん男っぽく育っています。

八重が銃砲に興味をよせるようになっていったのは、やはり覚馬の影響ですね。兄の覚馬は会津藩では珍しく開明派の武士で、江戸に出て佐久間象山や勝海舟、大木仲益など当時を代表する先進的な洋学者、砲術家に教えを受けている。何

がそこまで覚馬を駆り立てていたのか。それはやはり黒船到来による衝撃でした。諸外国に学んで、欧米に押しつぶされない強い国をつくりたい。当時の若者達が一貫して持っていた思想ですね。そういう流れの中に覚馬もいたのです。そして会津に帰ってきて、藩校日新館に蘭学所をつくり、みずから蘭学と洋式砲術を教えていた。そんな中で、八重は洋式銃砲に惹かれ、兄の教えを受けるようになっていく。洋銃を通じて西洋と出会ったのです。

覚馬はその後、京都守護職についた藩主・松平容保から呼びよせられ、大砲隊の指揮官として京都にのぼり、蛤御門の変では大変な武功をあげています。

ところが、そのあたりから眼病にとりつかれて、だんだんと視力が失われていった。明治になるとほとんど目が見えなくなってしまう。けれども覚馬はそれで引つ込むような人間ではなかった。目を悪くした後は藩の公用人につき、薩摩藩や長州藩などとも折衝をするなど、ネゴシエイターとして裏舞台で活躍していました。幕府側と薩長が戦いにならないように、勝海舟などともに奔走していました。

八重のほうには、故郷会津で一度結婚しています。相手はドラマでもすでに登場していますが川崎尚之助という但馬国出石藩、今でいうところの兵庫県豊岡市出身の男です。かれは覚馬が見込んで江戸から引つぱってきた人物です。当時江戸では有能な人物として知られていました。尚之助は会津藩蘭学所の教授人でしたが、最後まで会津藩士として取り立てられることはありませんでした。当時藩士でない者との結婚は普通では考えられません。おそらく有能な尚之助を藩にとど

めておくために意図的に仕組まれた可能性が強いとみています。その裏には覚馬の意志が働いていたにちがいありません。戊辰戦争はその三年後にやってきました。女こども、老人をまきこんだ大変悲惨な戦いでした。そのとき、山本家の人たちの動静は……。覚馬は京都にあつて公用人として開戦回避に走り回っていましたが、鳥羽伏見の戦いとき薩摩藩兵に捕らわれて、薩摩藩邸に閉じ込められていました。会津の山本家には四条河原で処刑されたと伝えられました。八重の弟に当時二〇歳の三郎がいました。かれは鳥羽伏見の戦いに参戦、淀で傷ついて大阪へ逃れ、和歌山から船で江戸にもどりますが、江戸の藩邸で死んでしまいます。形見の着衣と遺髪が八重たちのもとへ届けられます。八重はその形見の装束を身につけ入城するわけですね。六〇歳になる父の権八、八重の夫になる尚之助ですが、二人ともすでに城中に入っていますから、残っていたのは母のさくと、覚馬の妻うらとその娘のみね、そして八重、女性四人です。

新政府軍が城下に迫ったとき、女性たちはどのように対処したのか。三つの選択肢がありました。一つは、城に籠もって最後まで藩公と運命を共にする。もう一つは、「女性ばかり城に入っても兵糧を食いつぶすだけで足手まといになる」と、自刃して果てる。もう一つは郊外への避難でした。八重たち山本家の女こどもは、籠城ときめて城へ向かつて走ったのです。

八重の住んでいた家から城までは七百メートルほどありました。八重は大小の刀を腰に差して、七連発のスペンサー銃、重さ四キロほどありますが、これを持ち、左右の腰にはスペ

ンサー銃の銃弾を五〇発くらいつるして、雨の中を走ったのです。頭上から鉄砲の弾がどんどん飛んでくる。この七百メートルはかなり遠かったと思います。それでも何とか無事に入場することができました。

当時、城内にはほとんど兵がいなかった。主力は国境の守りについていましたから、城内には応援兵と少年兵と老兵だけでした。新政府軍、板垣退助と伊地知正治が率いる三千は、間隙をついて、あつという間に城下になだれこんできました。城側は、まったく予想外で、大変危ない状態だった。八重は入城するとすぐに北出丸へ走って銃撃に加わっています。八重の持っていた銃は、いつでも使用できる洋式銃でした。会津藩兵の主力は火縄銃でしたから、雨の日には使い物にならない。八重の銃は新式銃で晴雨を問わなかった。初日の危難をのりきったのは、八重たちの働きがあつたからなのです。

なんとか持ちこたえていくうちに周辺から主力兵がもってきて、長期戦になっていきました。八重はその日から髪を断ち、藩兵にまじって夜襲に出るなど、銃をとって戦う道を選んでいます。城中に女性は何百人ぐらいいましたが、彼女たちの役割は四つありました。一つは食事づくり、兵糧炊きですね。石の竈を城内に二〇ほどズラッと並べておき、大きな鍋釜を据えて湯をグラグラと煮え立たせる。玄米のままの米を研がずに流し入れる。湯炊きですね。炊きあがつたと思ったら、すぐにすくいあげる。それを固まらないながらも、おむすび状にして、兵達のもとへ運ぶのです。熱くて手の皮が剥げそうだったという談話が残っています。それを四六時中、休みなくやっていたのです。二つめは弾づくり。鉄砲の

彈丸と火薬をワンセットにしていく仕事。それから傷病兵の看護。四つめは「焼き弾消し」と言われる作業で、これは大砲の弾を消す作業です。当時の大砲の弾というのは、飛んできて落ちてすぐに爆発しなかった。導火線が信管まで燃えつきたときに初めてドカンとくる。だから落ちてシユルシユルと燃えているうちに、水にひたした蒲団や、筵をかぶせて消し止めたのです。

八重は砲術師範の娘らしく、奥御殿で弾消しの指導をしておりました。その結果、大砲の弾が二千発以上撃ち込まれましたが、御殿も天守閣も炎上しなかった。ボコボコになってしまいました。が、倒壊、炎上することがなかったのは、女性たちが弾消しをしていたからなのです。八重は攻撃に参加する一方で、女性たちに弾消しを指導したりで、ほとんど休みなく動き回っていました。

戦いそのものは、最初から勝負のゆくえがみえていました。まるで戦力がちがうのです。山頂から新式のアームストロング砲やメリケンボード砲を据えて間断なく仕掛けられる。ひどいときには二千発以上。城側は三の丸に主力砲を集め、八重と尚之助の指揮で応戦しましたが、戦況は厳しい状態であった。一時は反撃できてもつづかない。そのうち、武器弾薬が不足してくる。負傷者が続出する。さらに同盟関係にあった米沢藩とか仙台藩など奥羽諸藩が全部降伏し、会津藩は孤立していく。やむなく容保は降伏を決意、籠城からちようど一ヶ月後の九月二二日に開城となってしまう。

八重は文字通り火の女として戦ったのですが、藩家が倒れただけでなく、家屋敷も奪われてしまった。しかし、戊辰戦

争を戦った多くの女性たちの中で、八重は「戦は鉄砲ですもの」と決めておりました」と言っております。近代兵器というものに目を向けていたという一点において非常に先駆的で、まさにサムライレディーに相応しい活躍ぶりであったといえます。

けれども、父親は戦死、夫の尚之助とは開城ときが別離のときになってしまいます。結局女こどもだけが残ったわけですね。開城後、女こども、六〇歳以上の老人は立ち去り自由となり、八重たちは会津郊外で過ごしました。

女こどもの一家に新しい未来がひらけてきたのは、およそ三年後でした。兄の覚馬が京都で生存していることがわかった。覚馬は死んだと伝えられていたのですが、そうではなくて薩摩藩に捕らえられていた。

洋学者である覚馬は、囚われの身にありながら、口述で『管見』という意見書を著しています。

明治以後の日本がいかにあるべきかという意見書で、ここには明治維新の五箇条の御誓文に現れるような思想がほとんど織り込まれていました。天皇制のもとの三権分立、二院制による議会開設、産業振興、教育の充実など、二三項目にわたって国家のあるべき道を説いています。薩摩藩主に建言したのですが、同藩の重臣・小松带刀や西郷隆盛に評価され、岩倉具視にも認められ、許されて京都府の顧問に迎えられていたのです。

当時の京都は東京遷都のあおりで衰退、人口も激減、産業振興で町おこししなければならぬけれども人材がいないう。そこで覚馬を強引に引っばってきたのです。覚馬の手によっ

看護婦人会というのは、皇室、華族の婦人たちを中心としたボランティア看護婦の組織です。

なぜそんなものができたのか。日本赤十字社が発足し、看護看護婦の養成が急がれるようになった。それまで日本では、病人の世話をする看護人はすべて男性だった。どちらかというと汚れ仕事。何の教育も受けていない男性が看護人の仕事をしていたのです。これからはプロとしての看護婦を養成しなければならぬ。だから、まず看護そのもののイメージアップが必要になってきた。そんな背景から生まれたのが、皇族、華族の婦人たちによる看護婦人会でした。

ナイチンゲールが世に出てから、外国では貴族たちが積極的に救護活動に関わって、看護そのものが女性の進歩的な仕事であるとされていましたが、日本はそこまで行っていない。八重はそういう仕事に率先して乗り込んでいった。ここでも先駆的な役割を果たしています。

日清戦争が始まり、広島に五千人収容できる陸軍病院が作られました。このとき、はじめて女性の看護人が派遣されました。野戦病院へ行くわけではないから、たいしたことはないだろうと思われるかもしれませんが、これは命がけでした。

男性ばかりの病棟に女性の看護婦がはじめて入るのです。男女間の不祥事が起こるだろうと懸念されました。名誉ある軍人を女性が介護して、もし男女間のトラブルが起こったら皇国の恥である。もし、そんなことになれば責任は女性の側にあるのだと言われ、当時の社会的な風潮もそういう雰囲気だった。八重は監督として行ったわけですが、「もし何かあ

れば、生命をもって償うほどの覚悟をしておけ」と因果をふくめられていました。

もう一つ、八重たちが派遣された病棟は伝染病棟でした。コレラ、赤痢です。当時はまだ赤痢菌も発見されておりませんから、その看護は困難をきわめました。一つ間違えれば生命を失う、そういう非常にやっかいな仕事でした。そこで四ヶ月間、八重は監督者として勤めたわけですが、その結果、男性よりも女性の方が看護の仕事に適していることを実証してみせたのです。そして女性でも自分のできる仕事で国のために役立つことができるということをも身をもって示しました。ここでも、時代の最先端を走っています。

このときの働きで、八重は女性として初めて叙勲されています。当時、女性で叙勲の対象になるのは皇族方だけ。民間人で叙勲されたのは八重たちが最初でした。

晩年、六〇歳をすぎてから、みえてくるのは茶道家の貌です。当時、茶道というのはすべて男性のたしなみで、女性の茶道家というのはほとんどいなかった。ここでも女性の茶道普及に先駆的な役割を果たしています。

こんなふうには八重には四つの顔があり、つねに時代の最先端を歩んでいます。波瀾万丈の人生というと、ありきたりな言いかたになってしましますが、そのようにしか表現できない生きざまだった。何の虚飾もなしに、ドラマにしようと思えばなってしまう。

だから、筋だけをつないだような歴史的な読み物が、大河ドラマのスタートをにらみ、昨年の一月から一二月にかけて、劇画も含めてわんさと出てきました。本屋さんに行けば

たくさん並んでいます。

大河ドラマの予習という意味あいでは、ただの物語として読者の頭の中へ流し込もうとすれば、事実を記述する言葉によって筋骨きだけを短くまとめればよいのですが、そんな粗筋的なストーリーでは、とても人間の真実には迫れません。

小説のカタチにするというのはどういうことか。ただの物語として伝えるだけではない。言葉の表現に工夫を凝らし、具体的な場面を構成して、人と人との関わり、人と物との関わり、そして人と事件との関わりを描いて、そこに一つの世界を作りだしていくことだと思います。そのようにして初めて人間の真実がみえてくるのです。

八重を中心にして三つ小説を書き上げたわけですが、最初には『会津おんな戦記』でした。これは籠城戦をあつかった作品ですが、その時代こそが八重のその後の人生を決定づけたのだと思うからです。会津戦争で家族ともども籠城して、老人や子どもと一緒に戦い、多くの戦死者を目の当たりにした。そういう体験が、後に英語を学び、洋装洋髪の女性として生まれかわり、キリスト者の新島襄と結婚する人生へと結びついていった。会津戦争が背中を押したのだろうと考えたのです。

会津戦争そのものを書いた小説はいくつかあって、研究書もあります。だいたい大所高所から見て、戦い全体を俯瞰して書いたものが多い。会津戦争は老人、女子どもを巻き込んだ悲惨な戦争だったのですが、これを調べれば調べるほど、きわめて理不尽というか、悲惨な戦いであつたことがわかります。松平容保は京都守護職として孝明天皇に忠節を誓

い、会津藩は当初は皇軍であつたのですが、途中から思いがけなく朝敵にさせられてしまう。鳥羽伏見の戦いの後、賊軍になつて謹慎するけれども認められない。最後には倒幕の血祭りにあげられてしまうのです。惨たらしい話も数多い。

そこで視点をできるだけ低くして、八重という一女性の視点、つまり会津戦争を一兵卒の視点から書くように考えました。概説的にはならないように、できるだけ八重の思考と行動だけで押して行けたらいいなと……。

しかし、記録というものがほとんどない。八重が書きのこしたものの断片的なものばかり。明治になつてから雑誌に掲載されたいくつかの体験記、『会津戊辰戦争』という戦史の著者に宛てた手紙とか。それから『新島八重回想録』ですが、これは大部分が新島襄について書かれている。八重は自身のことについてあまり語っていません。

あとは八重について付随的に書かれた周辺記事を集めてきました。それらによつて、おぼろげながら主人公の人間像をスケッチして、会津若松へも行きました。いわば現地取材をやつたわけですが、それでも、あまり目新しいものは期待できませんでした。けれども、別の意味でいくつか発見がありました。

会津若松というのは歴史感覚の分厚い町で、戊辰戦争で死んだ人たちが、誰がどこで何歳で死んだのか、全部調べがついています。会津史学会、会津史学会という集まりがあり、今も延々と続いています。ある出版社に飛び込んで、教えを請うたところ、「会津のことを書いてくれるなら……」といういろあどバイスをしてもらいました。驚いたのは、八重の名

前は聞いたことがあるけれども、誰もがそれほど強い印象を持つていないという事実でした。八重は会津でも忘れられ、見捨てられた存在であつた……と。だんだんと彼女の置かれているボジションが見えてきました。そんなことを繰り返しながら、資料の掘り起こしを続けていきました。

そして、ひととおりの基礎知識を得た上で、会津若松を自分の足で歩いてみました。山本家の屋敷跡へ行つて、そこから入城した三の丸までどのくらいの距離があるのか、自分で歩いて確かめてみたりしたのです。雨の中、しかも重い鉄砲を背負つて城まで走るのは、いったいどんな感じだったのか。遠い道のりであつただろうな、途方もなく遠く感じたのではなからうかと考えたりするわけです。

城下を歩いていると、まるで迷路を歩いているような気持ちになります。甲賀通りを歩いていると、このあたりがドラマにも出てくる家老・西郷頼母の屋敷跡かと思つて立ち止まる。女子どもが入城したら足手まといになるといので、西郷家の家族は親戚を含めて二人全員が自刃したのです。妻の千恵子が九歳の次女を刺してから、次つぎと自刃したのですが、そこに飛び込んできた土佐藩士は、まだかすかに息があつて死にきれずにいる一六歳の次女を見つめます。彼女は「お味方ですか、それとも敵か」と聞きます。見かねて「味方です」と言うと、懐剣を差し出した。彼はやむなく介錯してやり、そのまま外に走り出していってというエピソード……。小説には書いていませんが、女子どもの置かれていた運命というものを自分の体験として想定していきました。

白虎隊の隊士たちが自刃した飯盛山に立てば、「なるほど、

このあたりならば城下に火の手が上がったら、城は攻め込まれて最期のときではないかと思うだろうな」というようなことを考えるのです。実際に書いた場面ではないのですが、肌で感じるものがありました。そんなことを繰り返しているうちに、自分の主人公も何となく動き始めたのです。

別に現地を歩かなくても書けるわけですが、自分の足で歩いてみるのとみないのでは、書くときの手触りというものは全然ちがってきます。

『織匠』の場合もおなじでした。舞台になる京都は、私にとつては知りつくした町です。それでも西陣界隈をかなり歩き回りました。それから、恵まれてリヨンにも行きました。彼らと同じように船でマルセイユからリヨンへ行けたらいいなと思つたのですが、旅行社に勤める友人に尋ねてみたら「そんな便はないよ」と言われて、しょうがないからパリからマルセイユへ汽車で行つて、そこからまたリヨンまでもどりました。リヨンという町は、古い町と新しい町を区別して残しており、古い織物工場も残っていました。

とある古いレストランで、案内してくれた現地の人に「三人の織り職人たちは百年くらい前に日本からリヨンにやってきて、揚げパンと粗末なチーズを食べていたらいい」という話をしたら、「それじゃ、店の主人に聞いてみよう」ということになり、年寄りの店主にたずねてみると、これだろうといつて出してくれました。外見はゴマ和えのようでしたが、ずばり「カニユウの脳味噌」というチーズだということです。「カニユウ」というのは織り職人のことです。そして「これにまちがいない」というのです。何ともいえない珍しい食

感でしたが、そのとき、何か、主人公とつながったような気がしました。

「百年前にやってきた日本人のことを調べている」というと、「それなら、赤いケットをかぶって町をさまよい歩いていたカニユーのことだろう」と。昔、父親に聞いたことがあるというのです。そんな話を聞いていると、主人公たちの尻尾をつかまえたような気がしてきました。

町を歩き疲れて、ローヌ川という大きな川のもとに行くと、鴨川にやってくるのと同じユリカモメが群れ飛んでいました。シベリアの方から来るのでしょうか。おそらく、京都に住んでいた彼らも、ユリカモメを見て故郷に思いを馳せたのではなからうか。そうなっていると、主人公がかなり身近になってくるのです。

そんなことで、調べて書く小説というのは、文献の読み込み、現地取材、インタビュなど、そういうもののコラボレーションの中から想像力を働かせていくことになりまします。材料は多ければ多いほどいい。しかし、多すぎると溺れてしまう可能性もあります。集めた上で、最終的には本筋と関わりのない分は全部切り捨ててしまう、そんなプロセスがどうしても必要になってきます。

本筋とは関係ないけれども、たいへん面白い、魅力的なエピソードというものが、たくさん出てきます。そのために脱線してしまふ、本筋を見失ってしまふ、そういうケースもよくあります。でも、書くこうとする本筋から外れてしまふものは、残念だが切り捨ててしまふ覚悟が必要になってくる。泣く泣く排除することも、けっこうあります。あくまでも自分

の書くこうとする太い一本の道筋、それを貫くかたちでないと、結果的にはバランスを失ってしまします。そのあたりの呼吸というのは、かなり難しいところがあります。

『新島襄とその妻』は、会津から京都に出て来てからの八重と新島襄との出会いから結婚、夫婦として過ごした時代を書いています。これを書いた直接のきっかけは、八重と新島襄が最初にたがいを意識するかたちで出会うシーンでした。

二人の出会いが、たいへん面白いのです。そのとき八重は自宅の庭の井戸に板を渡して、そこに坐って縫い物をしていました。そこへ新島襄が通りかかった。そして、「これは危ない」と思わず声をあげそうになったというシーンなのです。考えてみますと、八重は東北人ですから「涼しいからいいじゃないか」ということになるのですが、京都人からみれば、これは大変なことをしてくれた、と大騒ぎになります。

井戸には神様がいます。京都人はそのように考えます。水神さまがおわしますところなのです。「そんなところに女性が座るとは何事か」と謗られます。けれども新島襄はそんな八重をみて「日本人の常識にはまっていけない女性だ」というようなとらえかたをしたのです。そういう印象的な出会いがありました。

一つまちがえれば、井戸の中に落ちる。そういう板戸一枚の危うさ。これがその後の八重と襄の結婚生活の危うさをも象徴しているように思えたのです。

当時のキリスト教に対する反発というのは非常に強いものがあり、二人が結婚したところでいつ破綻するかわからないという側面がありました。結婚生活も危ういし、同志社も危

うい。仏教徒たちの反対運動は周囲からもうもうとわきあが
る。京都府も嫌がらせをする。密偵は常に後ろに貼りついて
いる。二人をとりまく環境は、ものすごい緊張感の中にあり
ました。そういう危なっかしい状態は、まさに井戸の上にわ
たした板戸一枚に乗っている状態ではなからうか。そういう
想いが、エネルギーになって、小説を書く道筋が見えてきた
のです。

板戸一枚の危うさのなかにあながら、八重は、周囲から
どのような非難を浴びようと、それに打ち勝って孤独な生
活を乗りきってゆきます。

男の新島襄は世のため、国家のために働くのだという自負
があり、同志社は神の御手にあるとかなんとか、大義名分で
乗りきろうとし、たとえ、そのために斃れることがあっても
世の賞賛をあびます。けれども八重にはそんなものはなかつ
た。あるのは底なしの孤独感だけです。鶴といわれようと、
ひたすら孤独な現在にじっと耐えてしのぶ、そういう道しか
ありませんでした。その孤独感たるや凄まじいものではなかつ
たのか。そういうことが、小説を書く大きなエネルギーに
なりました。

そして最近、八重の晩年までを描いた『小説・新島八重
勇婦、最後の祈り』という本を出しました。きっかけにな
ったのは会津若松のある高等学校にのこされている八重の
書です。「美德以為飾」という五つの文字の書です。「人間は
外見ではない。格好いい人というのは美しい行いをする人な
のだよ」と。「私は内面の美しさを飾りとして生きる」とい
う八重の決意表明でもあると思いますが、それを見たときに、

晩年、日清・日露に看護婦として従軍し、社会活動に尽くし
た八重の姿、前の二つの時代とはひと味ちがう八重の姿が浮
かび上がってきたのです。

当時はまだ女性に人権というものがなかった時代です。独
り身になった八重がどのような思いで社会に関わり、こじ開
けようとしていったのか。そのあたりに、なんとか触れるこ
とができたかなと思っています。

どんな場合も史実は飛び飛びでしかありません。川の飛び
石みたいなものです。それをひよいひよいと渡っていく。そ
して石のないところ、そこに自分の想像力で、読む人が納得
をするようなかたちのフィクションで橋を架けていく。小説
を書くということは、そんな作業になっていきます。底が浅
いフィクションではどうにもなりません。

たとえば……。一つだけ例えをあげておきましょう。八重
と新島襄はどのようにして結婚することになったのか。小説
に書くには、そのところを作者として、きちっと押さえて
おかねばなりません。それについて二人とも何も言っていま
せん。でも、小説に書く以上は、二人がどのようにしてそう
いう道に至ったのか、読む人がある程度納得できるようなか
たちで伏線を張っておかなければなりません。そこでどんな
ことを考えたのか。

密航青年の新島襄は、もともと薩長中心の明治維新をまっ
たく信用していなかった。新政府から手をさしのべられても
なびかなかった人物です。政府からもアメリカの伝道教会か
らもち縛られない人間として、キリスト教の学校を作ったかつ
た。しかも幕末、戊辰戦争の前にアメリカに渡っておりまし

から、戊辰の戦に敗れたという意識がない。挫折感というのがまったくなく、精神的に明治政府と対等の立場に立てる人物でした。

それに対して、八重は戊辰戦争で敗れた人間です。そういう人間からすれば、まるで自由な、薩長の政府に対して何のコンプレックスも持たない新島襄は、光りかがやく人物に見えた。好ましい男とみえたにちがいません。だから、八重と新島襄が結びつくのは、まったくありえないことではありません。八重自身もごく自然に惹かれていったにちがいないのです。ですから、そういう伏線を見せるように書いてきました。これもやはりフィクションですよね。

歴史小説、評伝小説、いずれの場合も実在の人物を扱っています。たとえば会津戦争なら藩主の松平容保、家老の山川大蔵、西郷頼母など実在の人物を扱っており、すべて本名で登場します。ですから歴史的な事実は克明に調べて、できるかぎり正確を期しています。しかしながら、吉村昭のように徹底的に事実だけを調べて、事実だけを追求して、事実こそがドラマというような方法は、とっておりません。

あくまで主人公によりそって、彼や彼女がその時代のワクのなかにあつて、どのように考え、どのような行動したのか、これを書きたいと考えております。

他にもたくさんお話したいことはありますが、時間が来てしまいました。「どのように調べて小説を書くか」というテーマに対して、「このように調べて書いた」ということしかお話できませんでしたが、この辺で終わらせていただきます。と思います。皆さん、どうもありがとうございました。(場)

●文校ブローグ「事務局日誌」より●

1/19福本武久さんの特別講座に50名。「お祝い会」に28名。 — 2013/01/21 22:31



おととい19日(土)、文校OB作家の福本武久さんを埼玉県からお招きし、「どのように調べて小説を書くのか——新島八重を中心に」と題して特別講座を持ちました。福本さんは60年代末に2年間、文校の通教部と夜間部で学びその後、「電車ごっこ停戦」で太宰治賞を受賞されています。

講座は、丁寧な講義ノートをもとに、〈近代女性の先駆者〉としての八重を浮かび上がらせました。

朝日新聞の記者も取材に来てくれました。

講座の後、教室を模様替えて、「NHK『八重の桜』関連6著書の刊行をお祝いする会」を開きました【写真】。参加者28名。

(小原)

内拍手)

(本稿は、講演を編集部でまとめ、福本武久さんの加筆訂正・了承を頂いたものです)

【編集後記】

●小特集は「恋愛小説」。若手三人に書いてもらった。成就する恋愛は小説になりにくいのは分かっている。けれど、三作とも、初めから主人公が「成立しないだろう」「失うだろう」という、予感・前提を持っている恋愛なのだ。「失うだろう」の背後には、「失った」体験がある。でもそれは、単なる失恋の体験だけではない。もっと、本質的なところで喪失感があるように思う。三作の主人公たちは、背後に何を「失った」うえで、現在があるのだろうか。

●扉のことは、早川敦子『世界文学を継ぐ者たち——翻訳家の窓辺から』（集英社新書）の、第一章のエヴァ・ホフマン「記憶を和解のために——第二世代に託されたホロコーストの遺産」に関連しての文章だ。●扉のことばとして紹介した文章のあとに、以下の文がつづいている。「そして、『靴』がエルズニアという九歳の少女の喪失の象徴であると同時に、その持主の思いの時を超えて伝えていたことに気づいたとき、私は、アウシュヴィッツで虐殺された多数の人間の証が、あとに残された膨大な靴であつたことを連想しないではいられなかった。」

●この本は、五人の作家の五つの作品を取りあげている。五作に共通しているのは、喪失とその喪失を時間にかけて深いところで「受け入れる」こと。そのことによって見えてくる心象風景を明確にしようとしていることだ。●ホロコースト、植民地、ナクバ（イスラエル建国と同時に始まったパレスチナ人の苦

難）による、「喪失」のありようと、それを受けとめたときの、その先にわずかかもしれないが存在する「希望」。●五作目に、ヤング・アダルト作家のデイヴィッド・アーモンドの、人間の成長における喪失とその先の可能性を紹介している。彼の作品では、主人公たちが異形な者に出会い、関わることで、変化していく。

●私たちの戦後が、「失った」ものをみつめ、理解し、その「失った」ものを記憶しつつ、その先を生きながらのこととしたら、それを十分にしてきたのか。新書版の小さな本が問うている。そして、「失った」という視点からみたとき、とても個人的な「恋愛小説」の主人公たちの心情にも繋がっているのが分かる。●二十一世紀の文学は、二十世紀の「失った」ものを背後に持つて、その先の世界を表現するものなのだろう。百年の背後。気後れしそだが、じつは私たちのすぐそばにあるそれは両親や祖父母などが生きてきた（時）なのだから。

●余談だが、最近、翻訳者の本がおもしろい。彼女のお勧めの小説は読むべしの鴻巣友季子「明治大正翻訳ワンダーランド」（新潮新書、ラテンアメリカ文学の翻訳を開拓してきた木村榮「翻訳に遊ぶ」（岩波書店）。●翻訳は二つの言語、認識、つまり違う世界の境界に立つことだからだ。「喪失」が、違う世界を突き付けられ、違う世界を生きなくてはならないことよって起こるのなら、翻訳とは自ら進んでそれをするということもある。そこからの発言はとても魅力的なのだ。（佐久間慶子）

樹林

2013-5

発行・2013年5月1日
定価（本体800円＋税）

発行人*長谷川龍生

編集担当*佐久間慶子

発行所*大阪文学学校・葦書房

〒542-0012 大阪市中央区谷町7-2-2-305（新谷町第1ビル3F）

☎06-6768-6195 Fax 06-6768-6196

http://www.osaka-bungaku.or.jp E-mail staff@osaka-bungaku.or.jp

レイアウト・校正編集*株式会社ドット・ウィザード books@dot-wizard.jp

印刷・製本所*株式会社N P C コーポレーション ☎06-6351-7271